

戦後日本社会にとって、象徴天皇制とはいかなる制度であり、象徴天皇とはいかなる存在なのだろうか。私たちは象徴天皇制に対してどのような感情を抱いているのだろうか。一九四六年の日本国憲法公布によって、天皇は「象徴」という憲法上の地位を得た。しかしそれによって、「象徴」という概念が直ちに定義されたわけではない。象徴天皇制やそのイメージは歴史的過程を経ることで、次第に形成・定着していくのである。では、その定着した象徴天皇とはいかなる意味を内在させた存在なのだろうか。以上のような問題は、これまで歴史学・政治学を問わず、憲法学・社会学・思想史、そしてジャーナリズムなど様々な分野で考察されてきたテーマである。にもかかわらず、必ずしもそれらの問いに対して解答を出し、「象徴」概念を明確に定義しつつ、象徴天皇制は戦後日本社会のなかでどのような位置づけにあったのかを提起した研究は数少ない。

なぜなのだろうか。それは、天皇制が国家機構・政治・思想の中心であった敗戦前との比較が大きいのではないだろうか。近代天皇制は大日本帝国憲法などに規定されたように、天皇を国家の頂点に置いた政治機構であり、その権力・権威は広範にわたった。また、イデオロギー的側面は教育や宗教など、生活の末端にまで及び、人々に影響を与え、拘束した。とくに、戦時中の天皇制をめぐる強烈なイデオロギー経験は、研究者が近代天皇制に注意を向ける動機となったと思われる。研究者が戦後において体感した民主的ではない権威主義的な動向も、そうした

イデオロギーの連続・復活と捉えられ、近代天皇制の研究が進められる要因となった。それゆえに、近代天皇制とは何であったのか、その構造や政治過程の解明が戦後継続してなされてきた。

一方、「象徴」となった戦後の天皇制に対しては、私たちは日常生活のなかでそこまで影響力を身近に感じることとは少ないかもしれない。大衆天皇制状況が次第に定着し、前述のような天皇制イデオロギーを普段から意識する機会が減少したからであろう。それゆえ、近代天皇制に比べると、研究も進展していないように思われる。例外として、第一に、紀元節復活に対する反対の動きや元号法問題への対応のように、戦前天皇制の復活を警戒する文脈のなかで研究が進められた。これは、象徴天皇制をそれそのものとして考えるのではなく、戦前天皇制の残余として分析しその影響力を批判していた。第二に、昭和天皇から明仁天皇への「代替わり」前後、「自粛」ムードから天皇制の影響力を問題視し、くわえて史料の公開が進んだことから、多くの研究成果が生まれた。しかし、その後は継続的に新しい研究が出されるものの、やはり近代天皇制の研究に比べればその数は少ないと言わざるをえない。これは、戦後日本社会のなかで象徴天皇制は大きな影響力を持つてはいない、今後も持つことはないと考えられたからではないだろうか。象徴天皇制が社会を構成する中心の一つだとは捉えない姿勢とも言えよう。

しかしそうすると、なぜ天皇制は敗戦後も継続したのか、という問題を解くことができないようにも思われる。「国体護持」は敗戦という危機のなかで、最も重要なテーマであり、私たちは天皇制を残す選択をした。少なくとも、政府とアメリカの共同歩調によって、「象徴」に衣替えすることで、戦後日本社会にとって天皇制が必要であることを決めたはずである。ミッチー・ブームはまさに、そうして作られた制度を人々が支持したことを示唆している。戦後日本のなかで、天皇制の位置は決して低くはないのである。

くわえて、二〇〇〇年代の女系・女帝論議に代表されるような現代の天皇制論を見ると、象徴天皇制維持が議論の前提として存在していることがわかる。なぜこのように、天皇制は日本社会に必要なとの意識が、前提なしに存在しているのだろうか。それは、現代の日本社会においても、天皇制の持つ意味が大きいからではないかと考

えられる。

明仁天皇が即位した後、美智子皇后とともにいわゆる「平成流」の皇室が模索され、そのイメージが定着している。度重なる自然災害の被災者に対して、積極的に慰問活動を行い、「癒し」のような感情を与えている。二〇一年の東日本大震災後、こうした象徴天皇制の役割はより増大していると見てよいだろう。

また、毎週のように週刊誌では皇室・皇族の動向が取り上げられている。単なる人々の興味関心だけでは、ここまで大々的に取り上げられたり、継続したりしないのではないか。天皇制が現代の日本社会の抱える問題をまさに「象徴」しているがゆえに、マスメディアはこうした問題を取り上げるように思われる。

このように、象徴天皇制をめぐる動向が現代においても再び活発になったことから鑑みると、日本社会にとって象徴天皇制とはいかなる存在であり、制度であるのかが、現在こそ根本から問い直されているとも言える。戦後社会においても、象徴天皇制の意味・役割は大きい。今こそ、戦後日本社会にとって象徴天皇制とは何であったのかを問う必要があるのではないだろうか。

本書が以上のような問題を考えるための、手がかりとなることを期待したい。

